「沈黙の声」にみる身体的志向性

― わざ研究へのメルロ＝ポンティ現象学からの接近 ―

奥井　遼

京都大学大学院教育学研究科紀要 第58号
2012

「沈黙の声」にみる身体的志向性

― わざ研究へのメルロ=ポンティ現象学からの接近 ―

奥井　遼

１．はじめに

本稿では、メルロ=ポンティ（Maurice Merleau-Ponty, 1908-1961）の現象学的言語論を取り上げ、言語と身体をめぐる教育学の議論にひとつの観点を提起することを目的とする。近年教育学において、理念や情報といった「表象」としての知識に対して、わざや勘といった「身体で覚える」知識への関心が高まっている。よく指摘されるように、これまでの教育学、あるいは学習指導要領において、教育実践の中で伝達されるべき知識としてふさわしいものは、表象化された知識であるとされてきた。つまり近代教育学は、予め定められた内容を効率的に伝授できるよう、学習内容に関する個別具体的な要素や特殊な事例などをできうる限りを一般化するよう方向付けられてきた[i]。その結果、知識を容易に習得しうる教科書を用いた学習と、情報処理を中心とした思考能力の向上と、筆記試験による学習成果の評定が、教育における主要な関心事として見なされてきた。

こうした表象主義的な傾向に対する批判を試みてきた近年の教育学の議論において、「身体で覚える」知識は有力な典拠となりうるように思われる。例えば伝統芸能や伝統工芸に伝えられている「わざ」の伝承、あるいはスポーツ選手や武道家などが経験的に習得している「身体知」は、表象化された知識とは異なって、限られた達人たちが身につけた特殊な知識のあり方を指し示すものである[ii]。ごくありふれた教育場面でも、学習者が、思考的作業とは違った水準で、身体を使った模倣や試行錯誤を通して、驚くほど複雑で多様な知識を獲得していることがあるとするならば、こうした観点は、表象化された知識を前提とした近代教育の行き詰まりを突破する糸口になる可能性も有していよう。

ところで「身体知」の探求においては、考えるよりも先に身体が動くというような技法が考察の中心に置かれるために、身体が感得する刺激や感覚などの直接経験に注目が集まる。そうした知識は、マイケル・ポランニーが名指したように文字通り「暗黙」の「知」であって、体験を言語化し、言葉で伝えたり共有したりすることはきわめて困難である。つまり言語における表象の作用は、「暗黙知」の前では無力であると見なされることが多い[iii]。

しかしながら言語と体験は、はたして排斥し合う関係にあるのであろうか。言語によって言い尽くせない体験はたしかに身近に溢れているが、表象の作用が「暗黙知」の働きをいつも阻害するとは限らない。それどころか、わざを駆使して細やかな動作を遂行するためには意識的作為が不可欠であるし、その内感を伝えるためには概念が必要であろう。「暗黙知」に関する探求を行うためには、黙して語らない身体の働きに眼を向けるだけでなく、言語の

働きを考察することもまた必要であるように思われる[iv]。

メルロ=ポンティは、言語と身体とをめぐる影響関係に対して緻密な考察を試みた哲学者の一人である。彼は、フッサール（Edmund Husserl, 1859-1938）によって創始された現象学を独自の方法で展開させ、言語行為が自身の身体の働きと複雑に絡まり合っていることを明らかにしてみせた。こうした観点を取り上げることによって、「暗黙知」といった種類の知識に対して、言語哲学あるいは現象学の側から接近する方途が示されるのではないであろうか。

以上の動機をもって、本稿では次の順序で考察を試みていく。はじめに、②メルロ=ポンティの言語論の位置づけを概観し、③ソシュールの構造言語学に対するメルロ=ポンティの読み込みを確認する。その上で、④メルロ=ポンティによるフッサール現象学の言語論への援用を検討し、最後に⑤教育学におけるメルロ=ポンティ言語論の意義を論じる。これらの考察を通して、言語と身体をめぐる教育学の議論にひとつの展望を示すことを試みていく。

２．メルロ=ポンティ言語論の位置づけ

メルロ=ポンティの言語論は大きく三つの時期（前期：『知覚の現象学』、中期：『シーニュ』『世界の散文』および「講義録」、後期：『見えるものと見えないもの』）に分けられる[v]。時期によって観点や術語に若干の変化が見られるものの、その基本的主張は終始一貫している。それは、「意味と言葉との関係」が、「われわれがいつも考えているような、あの各点ごとの対応関係」であるという、素朴な言語観を克服することにある[vi]。通常私たちは、言葉には、辞書に記載されているような形で、対応する意味がそれぞれ一つあるいは複数備わっていると考えている。つまり言葉は、意味を運ぶ通路のような役目を果たしていて、この通路のおかげで私たちは遠く離れた友人や昔に書かれた書物と意味のやり取りができると考えている。メルロ=ポンティは、こうした言語観を否定こそしないものの、言葉の二次的な使用にすぎないと考えた。

メルロ=ポンティは、言葉に対応して意味が備わっているとする発想の背後には、「思惟が表現以前にそれ自体で存在するかのように信じ込ませる、…われわれに内面的生活といったものが存在するかのような幻想」[vii]が控えていると考えた。それは、世界から切り離された純粋な認識主体としてのコギトを想定するデカルト主義的な発想に通じるもので、メルロ=ポンティにとって、こうした言語観は乗り越えられなければならないものであった[viii]。その意味で言語論は、メルロ=ポンティの哲学において、自らの哲学的立場をかけた重要な主題の一つであったといえる。

さて、言葉が辞書的に意味を伴うものでないとするならば、どのように言葉の意味を了解すればよいのであろうか。こうした問題は、主に中期の言語論において探求された。以下では、『シーニュ』に所収されているいくつかの論文を手がかりに、彼の言語論を検討しよう。

３．ソシュール言語学と「沈黙の声」

前期の『知覚の現象学』における言語論は、心理学や精神医学における言語の症例研究を軸に展開されたが、中期にいたると言語哲学そのものの検討に向かう。とりわけソシュール

（Ferdinand de Saussure, 1857-1913）の構造言語学から、メルロ=ポンティは大きな影響を受けた。ソシュールの基本的な発想によると、言語体系とは、それぞれの語が他の語との差異を示す記号体系であって、意味するもの（記号表現、signifiant）と意味されるもの（記号内容、signifié）との結びつきは、恣意的である[ix]。メルロ=ポンティは、中期の言語論、「間接的言語と沈黙の声」の冒頭部分で以下のように述べている。「ソシュールから学んだもの」は、「記号（les signes）というものが、ひとつずつでは何ごとも意味せず、それらはいずれも、或る意味を表現するというよりも、その記号自体と、他の諸記号とのあいだの、意味のへだたり（écart）を示しているということ」[x]である、と。またソシュールは、表現はその単語から離れて達成されるものではないと考えた。日常的な経験においても了解されるように、言葉の並べ方や語気次第では、同じ言葉であっても伝わる意味内容が変容してしまう。すなわち、signifié と signifiant とは表裏一体であって、言葉の表現を離れた「純粋な意味」や、表現形式そのものをもう一方から切り離すことは原理的に不可能であるといえる。

こうした、言語の恣意性、表現の唯一性というソシュールの見解を受けて、メルロ=ポンティは以下のように述べる。

> もしわれわれが、自分の精神から、われわれの言語がその翻訳ないし暗号であるような原テキストという観念を追い払うならば、完全な表現という観念が無意味であることが、すべての言語が間接的ないし暗示的であり、もしそう思いたければ、沈黙であることが、わかるようになるだろう。[xi]（傍点は原文による。）

上述したように、ソシュール以前の言語学、あるいはデカルト主義的な発想のもとでは、原テキスト、つまり表現を与えるより先に純粋な思惟そのものが存在し、それは適切に表現されれば完全に伝達されうると考えられてきた。デカルト主義的なコギトの措定を強く否定したメルロ=ポンティにとって、言葉の中に意味が純粋に内在していると捉える観点は、「己自身の端緒のことを忘れてしまった一つの不完全な反省」であり、「一つの幼稚さ」の露呈であるように映った[xii]。メルロ=ポンティはそのような発想を棄却し、すべての言語が「間接的ないし暗示的」にしか意味をもたらさない点を強調する。こうした見解は、言語論的転回を経た 20 世紀の哲学においてさして目新しいものではないが、意味を「分泌」し出す記号と記号との隔たりにおいて「沈黙」を読み解く点に、メルロ=ポンティ独自の着眼点がある。記述は以下のように続く。

> 要するに、われわれは、発言される以前の言葉を、言葉をとり巻くことをやめずそれなしでは言葉が何ものも語ることのないあの沈黙の背景を考察しなければならぬ。あるいはまた、言葉に混じりあっているあの沈黙の糸（les fils de silence）をむき出しにしてみなければならぬ。[xiii]

「すでにできあがった言いまわし」とは違って、「できあがりつつある言いまわしのもつ意味」の場合は、「意味は、さまざまな語の交叉点に、いわばそれらの中間にのみ現れる」[xiv]。

「語の交叉点」というのは、「側面的ないし斜面的意味」を滲み出す（fuser）ような語と語の間の空隙であって、そうした空隙を、メルロ=ポンティは「沈黙」という語によって言い当て、言葉の真の意味はこの「沈黙の糸」から現れると考えた。こうした「沈黙」についての記述は、もはやソシュールの言語学の範疇にはない。その意味でメルロ=ポンティの言語論は、ソシュールの構造言語学を基本的枠組みとしながら、独自の現象学的観点からそれを発展させたものであると見なすことができよう[xv]。

４．フッサール現象学と身体的志向性

メルロ=ポンティの現象学の原点は、フッサールの現象学にある。彼がフッサールから得た着眼点は、およそ以下のものである。私たちは普段の生活において、あるいは自然科学的な見方のもとでは、私たちの住む世界は客観的な成り立ちをしていて、それは数値や記号によって容易に表象されうると素朴に見なしている。しかしながらフッサールは、このような客観的世界は、自分の身体や意識によって「構成」された世界像でしかないと考えた。そこで、客観的世界を想定するような素朴な世界認識を「自然的態度」として批判し、こうした世界像を生み出す、意識と事物との共謀関係を暴き出すことを目指した。「現象学的還元」[xvi]とは、そうした目論みに基づいた「生活世界（Lebenswelt）」への帰還、すなわち「学問以前の、…つねに問われるまでもない自明性のうちにあらかじめ与えられている感覚的経験の世界」[xvii]を把捉するための方法である[xviii]。

メルロ=ポンティによる言語についての分析も、フッサールの試みの延長線上にある。つまり、言葉の並べ方や語気などを度外視し、「純粋な思惟」や意味そのものを想定する素朴な言語観に対して疑いの眼を向け、語の中から意味が立ち現れてくる際の、言葉と身体との共謀関係を丹念に記述することを試みた。その中で、素朴な言語観からすると「沈黙」としか捉えようのない意味の裂け目に、意味が現れる根源的な契機を見て取った。

「沈黙」は、とりわけ中期から後期にかけてメルロ=ポンティが好む言い回しである。メルロ=ポンティは、概念や事物が制度化・慣習化されて獲得している意味を鵜呑みにすることを拒み、哲学的な態度を持って「意味の発生」[xix]を問い続けた。したがって、「見えるもの」を可能にする「見えないもの」、あるいは「顕在的なロゴス」を可能にする「沈黙のロゴス」のように、意味の顕現を支える潜在的な働きは、彼にとって重要なモチーフであった。

ところで、言語が根源的に「沈黙」を伴うとするならば、私たちはいかにして言葉の意味を把握しているのであろうか。「沈黙」の発見は、純粋思惟による「完全な表現」という幻想を打ち砕くことに成功する一方で、言葉によって表現されるはずの意味を、沈黙のなかに消してしまうことにはならないのか。こうした問題に対してメルロ=ポンティは、「身体的志向性」という独特の現象学的概念を持ち出して応答する。『シーニュ』に所収されている「言語の現象学について」の中に以下のような記述がある。

> 意味作用に直接触れることなく接合してゆく言語のこうした遠隔的な働き、意味作用を語に変えることも意識の沈黙を破ることもけっしてしないくせに決定的な仕方で意味を志向するこうした雄弁さ――これは身体的志向性（l'intentionalité corporelle）の一つの顕著な

事例である[xx]。

身体的志向性とは、「自分の所作のおよぶ範囲について、あるいは自分の身体の空間性についての厳密な意識」のことを指し、「そのおかげで私は、自分が掴もうとしている対象物とか、私の身体と世界によって私に提供されている道のりとのあいだの大きさの関係とかを主題的に表象しないでも、世界との関係を維持することができるようになっている」[xxi]。通常私たちは、自らの身体がいかにして対象に到達したり障害物をよけたりするのかについて詮索することはない。身体的志向性とは、普段は目に見えず、意識の対象になることのないものでありながら、意識の成立与件として働き、その働きによって私たちが世界の中に生を営むことを可能にさせる作用である。

ここでメルロ=ポンティは、「私が自分の身体についてもつ意識」という経験に言及する。自分の手が何かに触れる時に、私たちは、対象に触れている手先そのものについての感覚を忘れ、対象の表面の手触りを直接的に得る。あるいは、大きな羽根のついた帽子を被った女性が、羽根の先を扉に当てることなく身を屈ませることができるのは、身体を導いている志向性が、羽根の先まで延長してくるからである[xxii]。身体におけるこうした志向性は、言葉を発する人、あるいは言葉を耳にする人についても共通であるとメルロ=ポンティは考えた。

> 私が自分の身体にたいしてはっきりした反省をしなくても、…私が自分の身体についてもつ意識が、直接的に対象のもつ筋っぽい、あるいはざらざらした或る風体を意味するのである。私が発言している言葉、あるいは私が聞いている言葉が、言語的所作の織り目そのもののなかに読みとられる一つの意味を含蓄しているのも、おなじようにしてであって、その結果、ちょっとしたためらい、ちょっとした声の変調、或る構文の選択だけでも、その意味を変様させるには十分なほどである。[xxiii]

すなわち、メルロ=ポンティによれば、身体が周りの事物を志向するのと同じような仕方で、言葉を発する人は意味を志向しているのである。それは「言語的所作」とでも呼べるようなひとつの振る舞いであって、「ちょっとしたためらい、ちょっとした声の変調、或る構文の選択」において意味を求めていくのである[xxiv]。言葉の活動は、「何かを意味しようという志向のまわり」にある「手さぐり」に支えられており、その手さぐりの中から言葉の意味は獲得されることになる[xxv]。その手さぐりが、語と語との意味の裂け目における原初的な沈黙の中を進むことで意味を獲得し、そうして獲得された意味は、出来上がった言い回しでも慣習に従った辞書的な意味でもなく、新たに創造されたものとなる[xxvi]。

ところで、言葉が新たな意味を開くという事象に注目しながらも、メルロ=ポンティは、「私の意味的な志向を表現にまで導くのに必要な語や言い廻し」が、「それらの語が所属している或る話し方の様式、それらの語をわざわざ私が表象しなくともひとりでにそれらの語を組織化して行ってくれる或る話し方の様式（style）」に依存することも認める[xxvii]。ここにひとつの錯綜した事態が見て取れる。ここでいう様式（style）とは、「すでに意味しつつある用具、すでに語りつつある意味（形態論的・統辞論的・語彙論論的用具、文学ジャンル、語りの類

型、出来事の提示の様式)」をふまえた言語活動のことである[xxviii]。つまり、意味を志向する言語的な「所作」は、言語を規定している諸々の「制度化」の働きに支えられることによって、初めて形を得ることになる[xxix]。身体的志向性そのものもまた、ある特定の様式によって方向付けられているとするならば、「意味の発生」には、言語と身体との緊密な連関が寄与しているといえるのである[xxx]。

５．教育学におけるメルロ=ポンティ言語論の意義

以上の考察を踏まえて、最後にふたたび教育学における言語の問題を検討してみたい。言語の中に「沈黙」を見出す観点は、「暗黙知」に関する言語の使用に新たな展望をもたらすものと考えられる。すなわち、体験や内感を言語に「翻訳」しようと試みる素朴な知識の伝達方法に、疑問が付されることとなる。言語を用いるとは、ある意味を別の意味に置き換えるといったような表象の交換ではありえない。そうではなくて、埋められない沈黙を生み出しながら、絶えず語を補うことで「側面的」に意味を伝える企てにほかならない。したがって、身体的な直接体験と、言語表現とを二元的に峻別するような素朴な言語観／身体観は、疑問に付されることとなる。

冒頭で掲げた「達人の体験は言葉にできない」という事態は、ある意味で全く正しく、ある意味で的を外していると言える。すなわち、最初に確固とした体験があって、次いでそれを言語に換えるといったような、体験／言語の識別を前提とした素朴な二元論的図式で言語活動を捉える限り、その命題は正しいといえる。しかしながら、言語の根源的な沈黙に立ち会い、意味がそこから立ち上がってくるような発話を試みるならば、むしろ言葉に新たな意味をもたらすような、体験を再び体験し直すような言語の使用が浮かび上がってくる[xxxi]。

その意味で、達人の言葉を規定している意識の様式、あるいは達人の感覚を支える様式を発見するという作業もまた、「暗黙知」の研究の一端として位置づくであろう。身体と言語との共同的な絡まり合い、あるいは根源的類似性を解きほぐす先に、身体的活動とは切り離された知的作業と見なされがちな哲学的思索もまた、身体の体験を、あるいはわざを深化させる方途として位置づけられるのではないであろうか。

最後に、本稿の内容を簡単に振り返りながら論点を整理していきたい。

①メルロ=ポンティはソシュール言語学の影響を受け、各々の記号の間で差異を明らかにする弁別的な働きを見て取った。さらにフッサール現象学を援用することによって、記号の差異における「沈黙」を記述し、意味の創出に関わる契機と見なした。

②「沈黙」を見出したことによって、言語活動を、手さぐりといった身体的行為のように意味を生み出す作業であると捉え直した。テキストに先行する純粋な精神という幻想は棄却され、意味は語る主体の発話（あるいは筆記）行為そのものから湧出するという、言語の創造性が浮き彫りになった。

③上記のような「沈黙」は、わざの達人の体験を言語で伝えることの困難さを改めて明らかにすると同時に、身体的体験そのものが言語の働きによって新たに形を得る可能性を示唆する。それは、わざの伝達において、身体を動かすことに内在している、言語をめぐる感覚を追究することの意義を浮き彫りにするものである。

以上の考察によって、「身体で覚える知識」についての考察は、知的作業や身体的活動との綿密な連関を包括的に捉えることで可能になる営みであることが示唆された。この観点は、理論と実践との乖離が問題となることの多い現状に対して一つの回答を提起するものであり、また同時にそれは、身体を通した教育を支えてきた発想の枠組みに対しても、一つの視点を投げかける企てである。

【注】

[i] その結果、知識を容易に習得しうる教科書を用いた学習と、情報処理を中心とした思考能力の向上と、筆記試験による学習成果の評定が教育における主要な関心事として見なされてきた。こうした批判は多くの研究者から提起されているが、たとえば西岡は、近代教育学が資本主義的要請の中で、「教育技術の改良」を終始目指していることに警鐘を鳴らしている。（西岡けいこ「脱自あるいは教育のオプティミスム――ソルボンヌ講義を起点とする肉の存在論の教育思想的意義――」『現代思想』36 巻 16 号、2008 年、pp. 347-357.）

[ii] 松下は、現代の学校教育の原理を問い直し、身体を通した「学び」の観点から、表象による「学習」を批判的に検討している。（松下良平「表象の学習・生としての学び」『近代教育フォーラム』14 号、2005 年、pp.49-62.）

[iii] 川口が指摘しているように、宮大工の棟梁であった西岡常一は、言葉を手がかりにして技を磨くような態度を強く戒めていた。もっとも、「『思考』を停止させず、むしろ活性化のために用いられる言葉」であるならばその限りではなく、「わざ」において言葉が活かされる方途も見出せる。（川口陽徳「『文字知』と『わざ言語』――『言葉にできない知』を伝える世界の言葉」生田久美子・北村勝朗編著『わざ言語――感覚の共有を通しての「学び」へ』慶応大学出版会、2011 年、130 頁.）

[iv] 生田久美子がこうした問題について、「わざ言語」という視点から独自の「学び」論を展開していることは周知の通りである。本稿は、生田の問題意識を引き受けながら、現象学の立場から考察を試みるものである。

[v]木田元『メルロ=ポンティの思想』岩波書店、1984 年、178 頁.

[vi] Maurice Merleau-Ponty, "Le langage indirect et les voix du silence". *Signes*. Gallimard, 1969. p. 53.（竹内芳郎訳「間接的言語と沈黙の声」『シーニュ１』みすず書房、1969 年、65 頁.）以下 S(li)と表記。

[vii] Maurice Merleau-Ponty, *Phénoménologie de la Perception*, Gallimard, 1945, p. 213.（竹内芳郎、小木貞孝訳『知覚の現象学』みすず書房、1967 年、300 頁-301 頁.）以下 PP と表記。

[viii] メルロ=ポンティは、純粋な思惟・表象・理性を認識主体に据える哲学的伝統を「上空飛行的」な思考（pensée de survol）として批判し、終生をかけて乗り越えようと試みた。Maurice Merleau-Ponty, L'oeil et l'esprit, Gallimard, 1964, p. 12. （滝浦静雄・木田元訳、『眼と精神』みすず書房、1966 年、255 頁.）

[ix] Ferdinand de Saussure. *Troisieme cours de linguistique generale : d'après les cahiers d'Emile Constantin + note manuscrite de Saussure : 1910-1911*. Pergamon Press , 1993, no. 1165.（小松英輔編、相原奈津江、秋津伶訳『一般言語学第三回講義――コンスタンタンによる講義記録、ソシュールの自筆講義メモ：1910-1911 年』、エディット・パルク、2009 年、断章番号 1165.）

[x] S(li), p.49.（58 頁.）

[xi] S(li), p.52.（64 頁.）

[xii] PP. p.iv.（6 頁）.

[xiii] S(li), p.58.（69 頁.）

[xiv] 「できあがった言い回し」については、直接的な意味があり、この意味は、「さまざまな外観や形式や確立された語に対して、点対点というかたちで対応している」といえるが、そこには「空

隙もなく、語りやめぬ沈黙もない」とメルロ=ポンティは述べる。S(li), p.53.（62 頁.）

[xv] メルロ=ポンティが『行動の構造』の執筆後、『知覚の現象学』を著すに当たって、フッサールの死後創設されたルーヴァンのフッサール文庫へと足を運び、当時未刊行であったフッサールの講義録やノートを参照し、1939 年の時点でいち早く後期のフッサールの思想を読解したことはよく知られている。（H・L・ヴァン・ブレダ、前田耕作訳「モーリス・メルロ=ポンティとルーヴァンのフッサール文庫」、現象学研究会編『現象学研究』創刊号、せりか書房、1972 年.）

[xvi] 現象学的還元とは周知のように、世界や事物が私たちの周りにある見なす素朴な態度を括弧に入れ、世界や事物がそのようにあると信じている私たちの意識の構造を明らかにする方法である。エドモンド・フッサール、渡辺二郎訳『イデーン I-I』みすず書房、1979 年、p.125.（原題 *Ideen zu einer reinen Phänomenologische Untersuchungen zur Konstitution*, 1913.）

[xvii] エドモンド・フッサール、細谷恒夫・木田元訳『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』みすず書房、1974 年、p. 106.（原題 *Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendentale Phänomenologie*, 1936.）

[xviii] こうした主張を受けて、メルロ=ポンティは「現実は記述すべきものであって、構築したり構成したりすべきものではない」という態度、および「認識がいつもそれについて語っているあの認識以前の世界へと立ち帰ること」を自らの哲学の課題に据えた。（PP. p.iii-iv.（4 頁-6 頁）.）

[xix] PP, p.xiv.（22 頁.）

[xx] Maurice Merleau-Ponty "Sur la phénoménologie du langage". Signes. Gallimard, 1969, p.111.（竹内芳郎訳「言語の現象学について」『シーニュ 1』みすず書房、1969 年、139 頁.）以下、S(pd)と表記。

[xxi] Ibid.（同上.）

[xxii] 「或る女性は別に計測しなくとも、自分の帽子の羽とそれを壊すかもしれない物体とのあいだに、一定の安全な間隔というものを保持するもので、彼女はちょうどわれわれがどこに自分の手があるかを感じ取っているように、どこに羽があるかを感じ取っているのだ。」PP. p.167.（2 巻 240 頁.）

[xxiii] S(pd). p.111.（140 頁.）

[xxiv] 「私が或る日〈あられ〉という語を〈つかまえた〉のは、あたかも或る所作を模倣するような具合にだった。…語の意味というものは、対象のもつ若干の物的諸特性によってつくられてはいず、それはなによりも、その対象が或る人間的経験のなかでとる局面、たとえば、〈あられ〉という語の意味なら、空からすっかりできあがって降ってきたこの固く、もろく、水に溶けやすい粒々のまえでの私のおどろきのことなのだ」PP. pp.461-462.（2 巻 296 頁.）

[xxv] S(li), p.58.（69 頁.）

[xxvi] 新たな意味の獲得について、メルロ=ポンティは以下のように記述している。「私たちが哲学書を読み始めるに際しては、その哲学者の用いている語にその語のもつ〈ふつうの〉語義をあたえることからはじめるものだが、そのうち少しずつ、はじめはそれと気づかぬ転倒によって、彼の言活動（parole）が彼の言語を支配してゆき、ついには、彼の語の用法こそが、それらの語に彼固有の新しい意味を帯びさせるにいたるのである。このときにいたってはじめて、彼は了解されたのであり、彼の意味が私のなかに据えつけられたわけだ。或る思想が表現されていると言えるのは、その思想をめざして収斂してゆく発言が十分数多くなり、十分に雄弁となって、その結果、ついに著者たる私に、あるいは他人たちに、その思想を曖昧さなく支持することができるようになり、また、私たちすべてが、その発言のなかにその思想の肉体的現前の経験をもつことができるようになる、そのときである。」S(pd). p.114.（143 頁.）

[xxvii] S(pd). p.111.（139 頁.）

[xxviii] Ibid. p.113.（142 頁.）

[xxix] 「用具」として使用できる言葉もまた、以前に「制度化」という過程を経たことに負っているとメルロ=ポンティは論じる。「すでに自由にし得るものとなっている諸意味は、…私の訴え得る、私のもっている意味として、制度化されたときである。」Ibid.（同上.）

[xxx] 付言すれば、メルロ=ポンティは、ヴァレリー、バルザック、スタンダールなどの作家、ある

いはマルロー、クレー、セザンヌなどの画家の仕事を、いずれも既成の文体や画法を打ち破り、新たな意味そのものを生み出すことを試みた、哲学者と同列かそれ以上に世界の意味の発生にこだわった人たちであると評価している。これらの人はいずれも、沈黙を破ることで新たな意味を生み出し、新たな意味を生み出すことでまた新たな沈黙を生み出すような、「沈黙の芸術」を深化させた人でもあった。

[xxxi] メルロ=ポンティの言語論は中期から後期に移るにつれて、「沈黙」と「意味」との絡まりあいを主題化させ、「述語づけられた意味の手前にある前所与的で受動的な原ドクサの層での経験を定位すること」と、「この経験を主題化して表現するための言語的な意味の層を回復すること」の二重の要求を自らに課している（加國尚志「沈黙の詩法――メルロ=ポンティにおける『沈黙』のモチーフ」『思想』岩波書店、2008 年、30 頁-31 頁.）

【引用文献】

Merleau-Ponty, Maurice. *La structure du Comportement*, Preses Universitaires de France, 1942.（滝浦静雄・木田元訳『行動の構造』みすず書房, 1964 年.）

———. *Phénoménologie de la Perception*, Gallimard, 1945.（竹内芳郎、小木貞孝訳『知覚の現象学』みすず書房、1967 年.）[PP]

———. "Le langage indirect et les voix du silence". *Signes*. Gallimard, 1969.（竹内芳郎訳「間接的言語と沈黙の声」『シーニュ１』みすず書房、1969 年.）[S(li)]

———. "Sur la phénoménologie du langage". *Signes*. Gallimard, 1969.（竹内芳郎訳「言語の現象学について」『シーニュ１』みすず書房、1969 年.）[S(pd)]

———. "Le philosophe et son ombre", *Signes*, Gallimard, 1959.（竹内芳郎・木田元・滝浦静雄ほか訳「哲学者とその影」『シーニュ２』みすず書房、1970 年.）

———. *L'oeil et l'esprit*. préface de Calude Lefort. Gallimard, 1964.（滝浦静雄、木田元訳『眼と精神』みすず書房、1966 年.）

———. La prose du monde. Gallimard, 1969.（滝浦静雄、木田元訳『世界の散文』みすず書房、1979 年.）

———. *Le visible et l'invisible*. Gallimard, 1964.（滝浦静雄、木田元訳『見えるものと見えないもの』みすず書房、1989 年）

———. *L'union de l'âme et du corps chez Malebranche, Biran et Bergson*. Vrin, 1968.（滝浦静雄、中村文郎、砂原陽一訳『心身の合一――マールブランシュとビランとベルクソンにおける』筑摩書房、2007 年.）

Ferdinand de Saussure. *Troisieme cours de linguistique generale : d'après les cahiers d'Emile Constantin + note manuscrite de Saussure : 1910-1911*. Pergamon Press , 1993. （小松英輔編、相原奈津江、秋津伶訳『一般言語学第三回講義――コンスタンタンによる講義記録、ソシュールの自筆講義メモ：1910-1911 年』、エディット・パルク、2009 年.）

Polanyi, Michael. *The tacit dimension*, Doubleday, 1966.

Ryle, Gilbert. *The concept of mind*. Hutchinson's University Library, 1949.

H・L・ヴァン・ブレダ、前田耕作訳「モーリス・メルロ=ポンティとルーヴァンのフッサール文庫」、現象学研究会編『現象学研究』創刊号、せりか書房、1972 年.

エドモンド・フッサール、渡辺二郎訳『イデーン I-I』みすず書房、1979 年.（原題 Ideen zu einer reinen Phänomenologische Untersuchungen zur Konstitution, 1913.）

———、細谷恒夫・木田元訳『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』みすず書房、1974 年.（原題 Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendentale Phänomenologie, 1936.）

生田久美子『「わざ」から知る』東京大学出版会、1987 年.
加國尚志「沈黙の詩法――メルロ=ポンティにおける『沈黙』のモチーフ」『思想』岩波書店、2008 年.
川口陽徳「『文字知』と『わざ言語』――『言葉にできない知』を伝える世界の言葉」生田久美子・北村勝朗編著『わざ言語――感覚の共有を通しての「学び」へ』慶応大学出版会、2011 年.
木田元『メルロ=ポンティの思想』岩波書店、1984 年.
熊野純彦『メルロ=ポンティ――哲学者は詩人でありうるか？――』NHK 出版、2005 年.
西岡けいこ「脱自あるいは教育のオプティミスム――ソルボンヌ講義を起点とする肉の存在論の教育思想的意義――」『現代思想』36 巻 16 号、2008 年、pp. 347-357.
樋口聡『身体教育の思想』勁草書房、2005 年.
松下良平「表象の学習・生としての学び」『近代教育フォーラム』14 号、2005 年、pp.49-62.

（臨床教育学講座　博士後期課程３回生）
（受稿 2011 年 9 月 2 日、受理 2011 年 12 月 26 日）

“L’intentionalité Corporelle” in Language: Studies of Body-Knowledge through the Phenomenology of Merleau-Ponty

OKUI Haruka

This paper proposes that the theory of phenomenology constructed by Maurice Merleau-Ponty (1908-1961) represents an effective method to analyze body-knowledge. In recent years, many educational researchers have paid attention to body-knowledge or tacit knowledge because it differs from intellectual knowledge, which modern educational studies have regarded as useful means to improve children’s abilities in school. Those researchers who criticize learning by an intellectual method as “representationalism” regard learning through bodies, actions, or tasks as important for comprehensive education. However, to seek to means of sharing tacit knowledge among people, it is necessary to rely on language or the “representation” itself. To a complex relationship between actions and representations, I take the phenomenology of Merleau-Ponty. In response to Saussure’s initial insight, Merleau-Ponty claims that meaning of words arises not through concepts that pre-exist in language but through language as a system of differences. For Merleau-Ponty, there is no meaning before the speakers start to speak, just a “silence.” The meaning emerges from the paradoxical relation between existing and not-yet-expressed meaning, through the expressive field situated between speakers, signs, and prior language use and current speech; all of these things are anchored by bodily intentionality (“l’intentionalité corporelle”). In light of this view of Merleau-Ponty, we can consider how we could express body-knowledge apart from the representational use of language.